

自分らしく・人間らしく生きる権利の“回復と拡充”をめざす歴史

岸 博実（京都府立盲学校）

本日は、歴史を通して、私達の実践をより裏付けのある豊かなものにするための道筋の一つをご一緒に考えてみたいと思っています。

40年前に新任の教員として、盲学校が何とも知らず、視覚障害とは？点字とは？全く何の知識もなく着任した私を、一から手ほどきして下さったのが永井昌彦先生でした。

本日、コーディネイトをしてくださる永井春彦先生のお父様である永井昌彦先生は、同志社大学が初めて実施した点字による入試を見事にクリアされて、京都府立盲学校（京盲）の英語科の教員としてお勤めでした。一方では、『視覚障害者労働白書』という膨大な資料集をおまとめになり、校内では、その頃大きな懸案でした重複障害児のための学級を高等部に設置するというテーマを巡って先頭に立って論陣を張っていらしかった、その姿を強く心に刻んで今日まで来ています。

当時、京盲では全生徒と全教員が食堂で対座し、討論する機会がありました。70年安保の直後です。学生運動の影響もあったのかもしれませんが、向き合っただけでかなり厳しい議論をしました。新規採用の私なども、学校側の座席にかしまって質問を浴びる訳ですが、私に与えられた高等部専攻科生徒からの問いは、「あなたは僕ら視覚障害者の気持ちが分かるか？」というものでした。皆様なら、どうお答えになりますか。未だに明確な答えには到達していない自分だと感じていますが、ともあれ、最初にその時その問いを問われたということは、ありがたかったと思っています。最近はどうでしょうか？こうしたある意味突き詰めた問いを投げかけてくれる生徒やユーザーは多いでしょうか？自己責任論の浸透の中で、他者に対して問いかけることを抑制し、内に籠ってしまうということがひょっ

とすると広がっているかも知れません。今、視覚に障害のある幼児・児童・生徒や保護者、重複障害児や中途失明者を含むその人々に向き合う側の感度、アンテナの感度が一層鋭く求められているように感じています。

ここしばらく、点字や盲教育の歴史をめぐるいくつかの文章を書かせていただいています。エッセイ「つぶらなわたし」など。『点字毎日』に「歴史の手ざわり・もっと！」を、京都のデジ雑誌『京まる』に「鳥居篤治郎スピリッツ」を今連載中です。昨年は、パリで行われた、13ヶ国の研究者が集まる＜盲人の歴史セミナー＞に講師の一人として呼んでいただきました(図1)。その折、20分で、日本の古代から現代までの盲人史を語るという離れ業をしました(笑)が、今日の中から、江戸と明治の冒頭の部分だけ読み上げます。



図1 盲人の歴史セミナー in パリ 2013

「盲人のギルドにあたる当道座は、徳川幕府から自治権を認められ、鍼医師、音楽家、政治顧問などとして幕府に登用された盲人もいた。学問分野では塙保己一も現れた。鍼治療の技法を革新し、それを盲人の適職として定着させた杉山和一は、幕府の公認を得て、1683年頃に



図2 杉山和一（江島杉山神社）

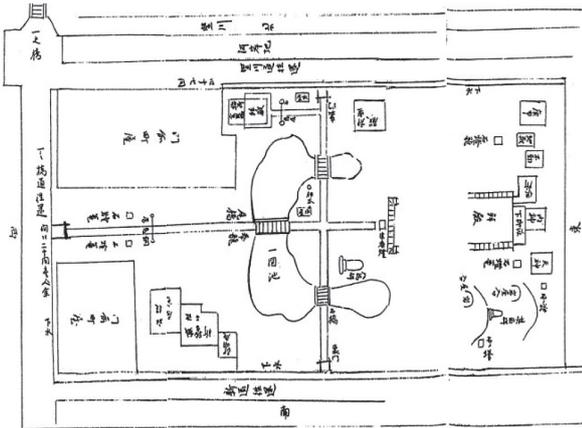


図3 鍼治講習所

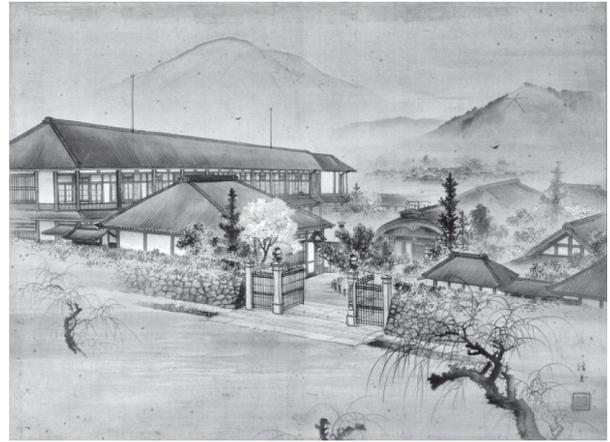


図4 京都盲啞院

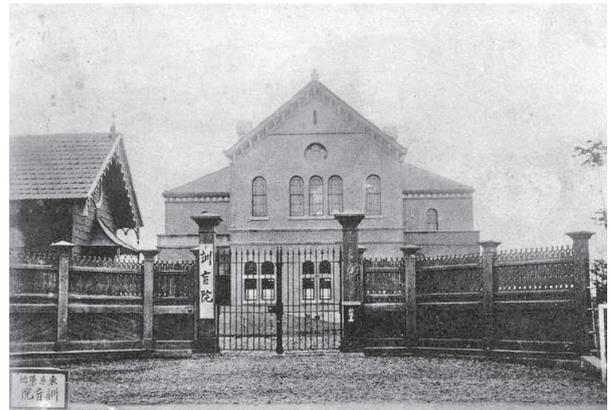


図5 楽善会訓盲院

鍼治講習所という学校、＜一般に世界最初の盲学校はパリの訓盲院と言われていますが、それよりも100年前に＞その講習所はできておりました（図2、3）。教育課程を整え教科書も作りました。しかし、明治維新後、封建制度を否定する政府は、当道座を廃止し講習所も閉鎖に追い込みます。そして富国強兵、自立自助の時代が始まり、盲人は弱肉強食の世の中に放り出されるとともに、新たに制定された徴兵基準によって兵士になれない存在と規定された。」

封建制度の枠内ではありましたが、教育機関と自治組織を持つことによって確保してきた社会参加の基盤が壊滅させられた明治の初めでした。日本の盲人たちは、それ以後、教育権をめぐる状況の打開を糸口に、近代的な自己実現に向けて歩んできた」と概括できるのではないのでしょうか。

まず、教育でした。1878年京都盲啞院発足（図4）、2年後、東京で楽善会訓盲院の授業開始（図5）。パワポではその初期の責任者であった3校長、東京の小西信八、京都の第2代院長・鳥居嘉三郎、大阪時代の古河太四郎の写真をか



図6 小西信八・古河太四郎・鳥居嘉三郎

かげています（図6）。

かいつまんで申しますと、古河太四郎の構想は「自己食力」、自分で食べていける力を養うのが教育目標、楽善会はその基調に自助論を据えていたと言えるかもしれません。古河は古い徒弟教育は否定しました。普通教育の上に職業教育を構築し、鍼灸と邦楽を柱にしつつ、紙燃（こより）細工にもチャレンジしましたし、理論的には、盲人と法律・法学は馴染みがよいという説を既に明治10年代に書き遺しています。東京

の職業教育もほぼ同様でしたけれども、中村正直の言う『西国立志編』の主張、「天は自ら助くる者を助く」という主張は、福沢諭吉の“学問のすすめ論”と並行して教科書にも扱われ(図7)、日本国民の自我形成に大変大きなプラスの意味ももたらしたと思いますけれども、一方では、人々を、中でも障害のある方々を立身出世競争の中に放り出し、見える者中心の社会に適応して生きることを求め、慈善の対象にその存在を追い込むという役割も、厳しく言えば果たしてしまったのではないのでしょうか？



図7 西国立志編

なお、エピソードとして付け加えますけれども、ロービジョンの先駆けは、京都では明治10年代、千本の療眼院という眼科を営んでいた益井茂平・信親子に求めることができます(図8)。盲啞院の生徒の検診をし、入学斡旋をし、寄付を重ねているのが益井親子だったという史実が分かってきています。大阪では緒方惟準が大阪模範盲啞学校の生徒の眼病治療に当たりま

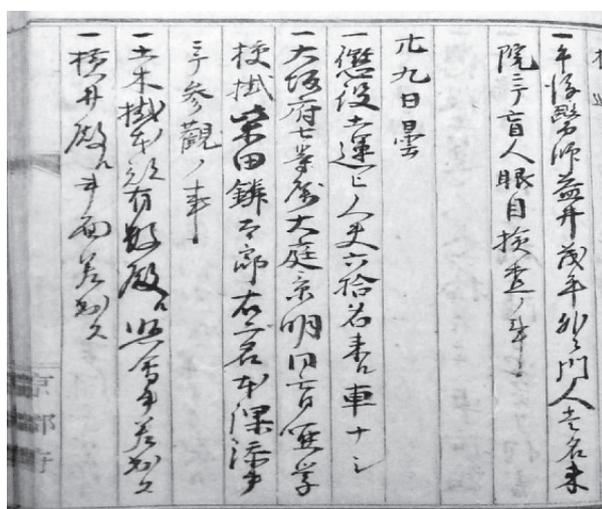


図8 益井茂平・信(盲啞院日誌より)

した。京都では、療病院から今日の京都府立医科大学が生まれますが、その眼科の浅井郁次郎も明治24年に盲啞院の生徒を対象に眼疾調査を行っています。

もう一つのエピソード。一般に、盲導犬は昭和初頭に知見が移入され、昭和14年のゴルドン君とオルティー号の来日が、大きく報道されたことによって注目されたというふうには書き起こされることが多いと思いますが、実は明治21年に日本人が描いた盲導犬の絵が筑波大学附属視覚特別支援学校に残されています(図9)。これはドイツの盲教育書—ドイツ語の本—の中にあつた盲導犬の挿絵を盲啞学校の聾啞の生徒、江島安之助が模写したものだそうです。実は一滴の雫のように、盲導犬についての認識が明治21年の東京にあつたのです。なぜそれが波紋として順調に広がらなかったのか？歴史の問題として検証も必要ではないかと感じています。



図9 盲導犬の絵(江島安之助)

初期の盲教育では文字が大きな問題でした。明治11年の京都にも、13年の東京にも、まだ点字がないという社会的条件が存在するのみでした。まず、木刻文字が作られました(図10)。木に刻むわけですね。漢字・ひらがな・数字などを。京都に残っているものでは、表面には凸、裏面には凹で、同じ字が彫られています。当時の文書には「先生、僕は凸のほうがよくわかります」という生徒と、「いいえ、私は凹のほうがよう分かって好きです」という具合に二通りの反応があるから両面彫ったという旨が書かれています。個に応じた提供がされていますし、ユーザー側から言えばサービスを選べる条件を既に明治12年に実現していたことに、私は驚き、感



図 10 木刻文字（木刻凹凸文字）

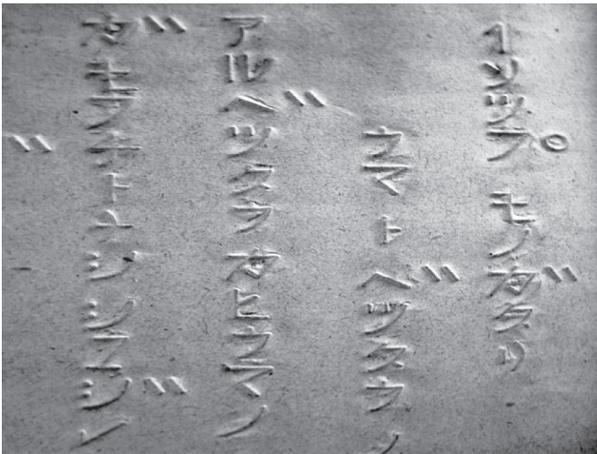


図 11 カタカナ凸字・イソップ物語

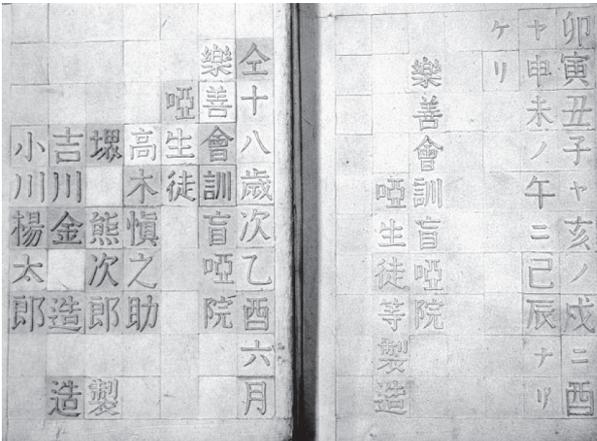


図 12 凸字・療治之大概集

動すら覚えます。この木片の、文字の向こう側の辺の中央部には、わずか3ミリから5ミリですけれども、切込みが入っています。ですから文字の向きは、一旦そのことを教われれば次に新しい文字を手にしたとき、たちどころに見えない子にもわかるという仕組みが既に生み出されていたわけです。その他にも紙を利用して、カタカナ凸字のイソップ物語、杉山和一の鍼の理論書『療治之大概集』等も漢字交じりの凸文字教科書として作って利用したのが、明治10年代

の東京・京都です（図11、12）。

次にご覧いただくのは、京都の一期生が書いた鉛筆の字です（図13）。文面は、琴の演奏会か温習会かに招かれたのに対する返事の手紙です。書き手・小島てつは、昭和まで京都市内でお琴の師匠として立派に生きた人です。全盲の人の鉛筆書写として、よく整った筆跡ですよ。ただ、ご留意いただきたいことがあります。これだけの墨字が書ける域に到達した視覚障害者がいたのは事実ですけれども、点字がなかった明治10年代の京都盲啞院では退学者が続出しています。学習の困難が大きな理由でした。普通文字しかないということの限界はここに明らかです。晴眼者の世界に合わせて生きることを求める教育の限界、厳しく言えばそうも言えるのではないのでしょうか？

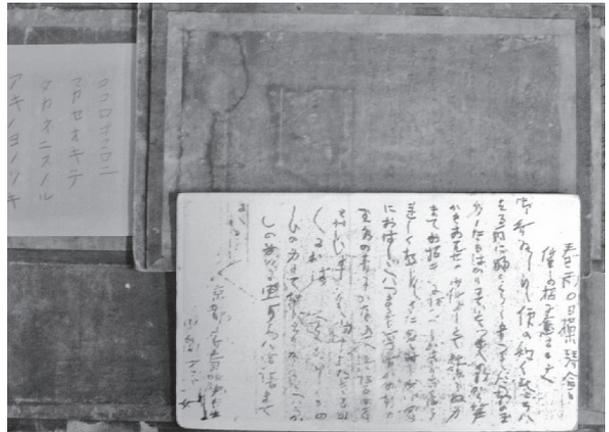


図 13 京都盲啞院一期生の鉛筆字

根本を変えていくのが石川倉次たちの生み出した点字です（図14）。イギリスのアーミテージに出会った手島精一という東京教育博物館の館長が持ち帰っていた、アーミテージの『盲人の教育と職業』という書籍（図15）。持ち帰ってから数年後、その本が、小西信八東京盲啞学校長の手に渡ります。部下である石川倉次に点字の研究を依頼する。そこから始まって行きました。縷々ここで述べる時間はありませんが、私は、日本の点字研究のこのスタート時点で最も意味があったのは、東京盲学校の晴眼の教師だけではなく鍼灸の最初の教員であった盲人・奥村三策もそれに参加をしていたこと、そして、生徒も伊藤文吉、室井孫三郎が教員と対等の立場で検討会に参加をし、意見を述べていた、自分の考えた案も提出していた、というところだ



図 14 石川倉次

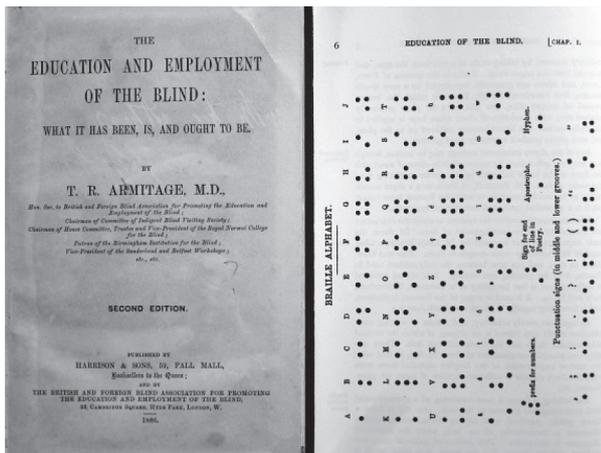


図 15 『盲人の教育と職業』

と感じています。4回の選定会の結果、石川倉次の案に盲生たちも心からの支持を表明して決しました。(さらにさかのぼれば、高田出身の盲生・小林新吉が小西の提示したアルファベット点字の読み書きを円滑に行ったことが決定的な推力となりました。)

日本に点字の知識をもたらしてくれたアーミテージは、イギリスで凸字を継続するか、点字を選び取るかの検討を行った際に二つの基準を設けていますが、その一つ目が次の1文です。「盲人に対する最善なるものの唯一の審判者は盲人でなければならない。」この表現を以て無限定に拡大するのはどうかという思いは私にもありますけれども、非常に大事な指摘だと思います。

ちなみに、彼の『盲人の教育と職業』第2版、手島精一と出会った後、増訂として書き直された第2版には、日本の盲人の歴史が1ページ以上にわたって書かれていて、その中には日本では封建時代からシャンプー（あん摩）をする職業人として、ミュージシャンとして、盲人達が活躍していることが描かれています。

6点点字を生んだルイ・ブライユが盲目の当事者であったことは今更言うまでもありません。昨年パリのパンテオンを訪れたとき、そこに安置されているルイ・ブライユの石像の胸に左手を当て、私なりに彼の心を問うてみました。

明治期後半からの盲教育の展開においては、東京盲啞学校の小西信八の権利意識がもたらした地平が重要だと考えます。彼は1896年から98年の間、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツの障害児教育を視察しました。パワポはそれから戻った明るる正月に小西が京都盲啞院の第2代院長鳥居嘉三郎に宛てたハガキです(図16)。ハガキに点字が打ち込まれています。指文字でN.KONISHIともデザインされています。小西は既に渡欧する前からその考えを持っていたようだけれども、帰国後、「国家による教育を受ける権利」が、盲児、聾啞児にもあるとはっきり主張するようになりました。帝国憲法下における権利ですから、いわゆる臣民としての権利という枠組みであったとは想像されます。天賦人權論に立った権利認識であったかどうか、これは吟味を要しませんが、ともかく明治39年には初の全国聾啞教育大会を開き、閉会の翌日10月16日には東京・京都・大阪、3つの盲学校の校長・院長が打ち揃って時の文部大臣を訪ねて、盲・聾教育の義務化と分離を上申しました。それが実現するのは、半ば実現したのが大正12年の盲啞教育令、完全な法令上の実現は昭和23・4年教育基本法、学校教育法のスタートまで待たねばなりません。実際には、最後に盲・聾分離が行われたのは石川県で、それはなんと昭和40年です。明治11年の盲啞教育



図 16 小西信八から鳥居嘉三郎への葉書

開始から、90年の年月を要してやっと行われた盲・聾教育のそれぞれの専門性に基づく分離が、特別支援教育制度の下で、今、崩されようとしているのではないかと、その危機意識を私は隠すことができません。

今井漸吉という聾啞の卒業生が、恩師鳥居嘉三郎に送った手紙があります(図17)。一部だけ読み上げますが、病気で倒れた聾啞の今井君は、この時、入院しています。

「何とも恐れ入り候へども、先生の御古着にて結構に御座候へば、袷、折襟、シャツ、股引、各一枚、ご恵与下されまじく候うや。病軀、包むに衣なく寒空に向かい候折柄、いたずらに空拳を撫して、途方に暮るるのみに御座候。願はくば、この鉄面皮御許し御座候て、御聞き届けてくだされ候らえば幸福実に之に過ぎ申さず候」

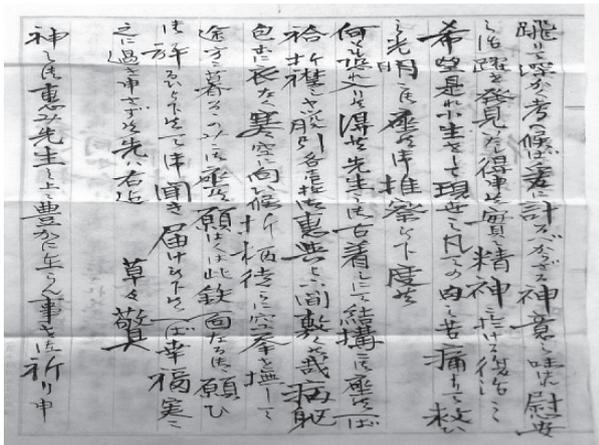


図17 今井漸吉から鳥居嘉三郎への手紙

恩師に宛てて切々と窮状を訴えました。鳥居はクリスチャンです。この一人の生徒の苦しみに向き合わなかったはずはありませんが、それだけではなかったのだと私は見えています。実際には一年前に着手していますが、明治39年に日本盲人会を組織をします(図18)。東京と京都の学校の教員とその教え子たちが呼びかけ人に名を連ねました。

そのメンバーの一人、左近允孝之進が点字新聞「あけぼの」を創刊していきますけれども、それに先立って明治38年の時点で『盲人点字独習書』という書物を発行しています(図19、20)。文部省が『日本訓盲点字説明』を出すのがやっと明治44年です。それよりも6年早く当事者である左近允がこの仕事をしているということも忘れら

れないことです。京都では「てんじせかい」という点字雑誌を同窓会が発行していきます(図21)。同窓会作りは明治24・5年に東京でも京都でも着手され、それ以後全国の盲啞学校に広がって行きますけれども、大正に入ってそれらが一つにまとまる連合体も結成されています。これが、個別学校ごとにバラバラであった視覚障害者の願いをつなぎ、自分たちの機関誌も持って行こう、自分たち自身の団体を結成して歴史を一步前に進めようという動きの基盤になったことは間

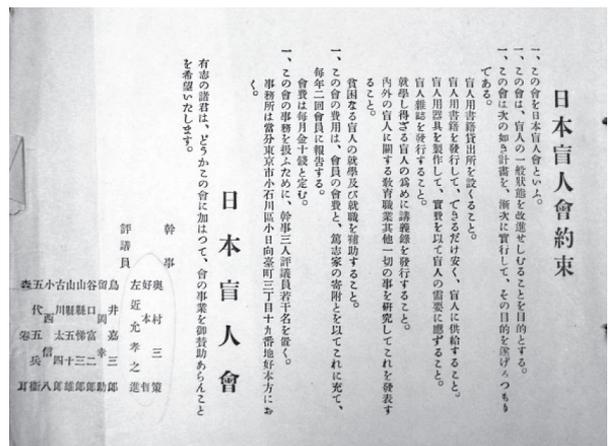


図18 日本盲人会設立呼び掛け文

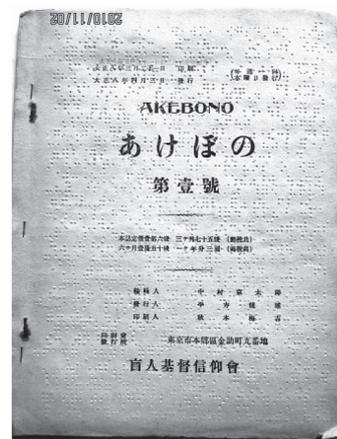


図19 点字新聞『あけぼの』表紙

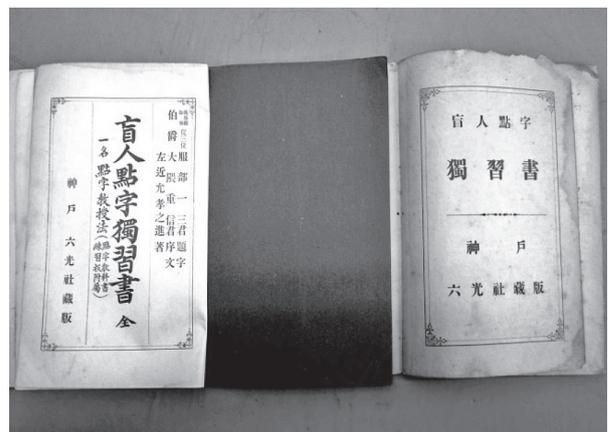


図20 『盲人用点字独習書』

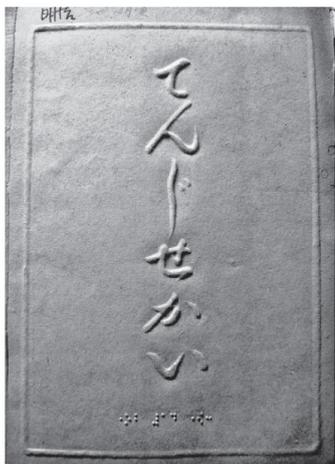


図 21 『てんじせかい』表紙

違いがないと思います。一人に手を差し伸べることを大事にしながら、大きな枠組みでの問題の改善、解決を明治の教員たちは図ったというふうにとめることができるかもしれません。

京盲の同窓会は、パウポに上げていますように、昭和5年に国産第1号として、同窓会製造の点字タイプライターを販売しました(図22)。点字盤も「京盲同製」と彫り込んで販売しました。長い点字定規は1行に95マスです。大きな図表を書きたかったのです。小さな点字定規は、現在の一般の点字定規と左右同じ幅ですが、その中に48マス書けます。かさ張りがちな点字です。1行1ページに1文字でもたくさんの情報を盛り込みたいと考えたのでしょう。これを鳥居篤治郎(京都ライトハウス創立者)などは使いこなしたとみられます。

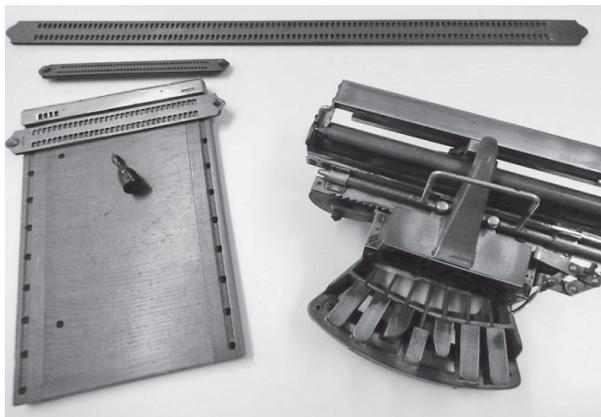


図 22 アイデア点字タイプライター等

東京、大阪は別として、京都にもまだライトハウスも図書館もなかった時代、同窓会が、教育の問題だけではなくて、いわゆる機器、文化、福祉、職業問題、制度のことも含めて取り組ま

ねばならなかったのです。今は、都道府県による到達点の差があるとは言え、大きく状況が変わっていますけれども、その中で縦割りの弊害もないわけではなく、新たな緊密な連携のあり方も問われ始めているという局面ではないでしょうか。

自己実現を求め続けた視覚障害者の主体が確立されてきた過程。今日は粗い伝い歩きを試みました。それを、もっと深く掘り起し、新しい自立自助論—公助を事実上否定していくかのような今日の方向性—を超える力はどこから生まれてくるのかを、是非とも探り当てていきたいと思っています。

次に木下和三郎の盲人歩行論に少し触れてみましょう(図23)。木下は盲人です。兵庫盲と神戸盲の教員になります。「盲人歩行論」という書物及び論文が彼にはあります。最も古いのは大正8年1月28日付け、東京で盲学校同窓会が出していた「六星の光」という雑誌の中の「盲目歩行について」という記事です。



図 23 木下和三郎

そこで木下は、「盲人の空間感覚ということが、物体のない大小、形状、位置・性質等の詳細にわたるものであるならば、盲目歩行として論及せんとするところはその範囲を異にするもので、大小、形状、性質などは従として深く問わず、もっぱら位置を測定して物体と自己の間に一定の連鎖を保って、歩行の敏活快軽にして安全ならんことを期せんとするものであります。」と述べています。杖を持つことの人間的な意味についても述べています。

鳥居篤治郎はそれについて次のように書きました。「昭和14年、当時の傷兵保護院の出版で

盲人歩行論と言うパンフレットがあります。著者は神戸市立盲学校教諭木下和二郎君で、当時はまだアメリカでも盲人歩行学という言葉もなく、白ステッキもなかった時代でありました。しかし、著者は自分が全盲である体験を基本として立派な歩行学を組み立てたのであります。今日なお一とあるのは昭和30年代です一、アメリカのものと比較して見劣りしない論文であります。」と。盲目歩行の主体者の優れた歩行力を蓄積、発揮してきた先達や、現在のベテランの方々、青年の持つ体験やノウハウをもっと集約できないだろうかという思いが、私の胸にはひそかにあります。

鳥居は幼い頃失明しますが、その父の教育方針に沿って子ども時代に近所の川の中を竹馬に乗って歩いたことがあるというような、冒険心一杯の伸び伸びとした子ども時代を経験しています。鳥居の親友小野兼次郎は、「2度連れて行ってもらったところには、その次は一人で行ける。」と豪語しています。なぜそれができたのか。突出した力を持っている方の例を一概に普遍化しようとするのは正しくないと思いますけれども、何か考えさせられる部分があるのではないのでしょうか？盲目の歩行訓練士というのはいり得ないのだろうか？ということも漠然と考えることのある私です。

同様の指摘は教育の分野にも当てはまると考えています。今、盲学校の教員が通常校に在籍する子のための支援員やカウンセラーの役目を果していくことが求められていますけれども、盲学校のそのコーディネーター、スタッフの中に視覚障害当事者の教員が少な過ぎるというべきでないかと私自身は思っています。他者に対して言うだけでなく、盲学校自身のあり様として考えているということをご理解ください。

最後にもう一度鳥居篤治郎に登場してもらうことになります。本が読みたいと鳥居は熱望しました。彼の歌にこうあります。

新しき本を買って来て

この本がみな読めたらと 匂い嗅ぎおり

もちろん墨字の本の話です。周囲の仲間たち

と語り合うことを通じて、全国的に大きなウェーブとなった愛の鉛筆運動に京都でも取り組みます(図24)。その結果として、最終的には自らの家宅を寄付するという決断までしてスタートさせたのが京都ライトハウスでした。



図 24 愛の鉛筆運動

同じ時期に盲学校高等部生にも全ての教科の教科書がほしい、国の責任で発行してくれという運動がありました。全点協運動と言いますが、その全点協運動について研究論文を書こうとしている大学生が京都府立盲学校の資料室に通ってきています。時代の若々しい息吹を掘り起こすことを通じて、今日の困難を乗り越える知恵の一部であっても見出していきたいとがんばる彼を応援したいと思っています。

鳥居はいくつかの重要な言葉を残しましたが、二つ触れます。

一つ目は「点字良心」です。「文字や符号を正確に、そしてマスあけを正しく、能率は後回しにしてご勉強願いたい。」日本点字研究会時代、研究をけん引した鳥居篤治郎の切なる願いです。これはこと点字に限らず、教育、ロービジョンケア、リハビリ、職業訓練、労働保障、福祉、文化のどの分野で働く私たちにとっても、繰り返す、問い直し、味わい尽くすべき言葉ではないでしょうか？いたずらに速さ・成果を急がず、ゆっくりと正確に正しく仕事をするることについて。

パワポ画像は、鳥居篤治郎と妻の伊都と、幼い長男昭君です。昭君は青年期に病気のため亡くなっていきました。私の先輩教員の一人は、「従って、鳥居先生夫妻にとっては京都ライトハウスは我が子と同じなんだ・・・」とおっしゃいました。その鳥居が今から52年前に残した言

フランスのルイ・ブライユが見つめました。
日本の石川倉次が育てました。
初めは、夜の文字でした。今では、星です。光です。
目の見えない人にバリアをやぶらせます。
誰にも役立つユニバーサルデザインです。
点字は、「読みたい！」願いを叶えます。
「書きたい！」気持ちを突らせます。
「支えたい！」思いも受けとめます。

つぶつぶ、つぶらの

点字は、絵本になりました。ドラえもん。
化けました。切手やコインにも。
表札です。シャンプーや缶ビールの。
散歩します。エレベータであなたを待っています。

奏でます、音楽を。絵にも描かれているんです。
いつか、きっと、宇宙船にも刻まれるでしょう。
どの国でも、`a b c、の点字は、同じ。
日本語も、韓国語も、中国語も表せます。
英語も、ドイツ語も、スペイン語もラテン語も・・・。
青い地球に、くまなく満ちて
つぶつぶ、ちゅぷちゅぷ、
ちっちな わたし、あなたへ
「こんにちは！」。

「日本点字制定 120 年記念エッセイ入選作」

『視覚障害』2010 年 12 月

(視覚障害者支援総合センター)